

大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

NO.82
2010.6

春

特集

大学からの発信、大学出版からの発信

【インタビュー】

大学の未来、人文学の未来

—— 亀山郁夫・東京外国語大学学長に聞く…… 2

オープン化する教育と学術出版のゆくえ

—— アメリカにおける取り組み 飯吉透…… 11

二十一世紀懐徳堂とアウトリーチ活動について

—— 大阪大学が目指す社会学連携活動 小澤洋子…… 16

かたい本が売れない

—— 大学出版局に期待すること 笠原敏雄…… 21

●連載

初版本、ナンセンスなフェティシズム

小杉未醒訳・画『新譯繪本水滸傳』 酒井道夫……表2

大学出版部ニュース…… 26



一般社団法人大学出版部協会

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

『新譯繪本水滸傳』

酒井道夫（二代目九波堂）



見るからに頼りない三つ目綴じ。これだけ開くのも背が壊れてとれているから

同時に入手したはずはないが同じ本（佐久良書房 一九二一、木版彫刻・岡田清次郎）が二冊ある。なかなか贅沢な作りで、「繪本」というくらいだから挿画がめつぽう素敵だ。小杉未醒が「巻末言」で自らのめかしているように、北齋による『新編水滸傳』の挿画に張り合って制作したらしいから、力が入っている。品格の高い挿画が一〇六点（内半数が別丁二色刷り）挿入されている。豪華本というべきだろう。未醒マンガのなかでもことさら見事な出来になっているのは、彫師・岡田清次郎の力もよほど与っているのではないだろうか？

こんな本を二冊も所有することは私としては異常事態なのだが、二冊とも痛傷本だった。激しく壊れていたの、思いのほか安かったのだ。しかも落丁もあつたのだが、双方の折丁を拾い合わせたら一冊分の完本ができた。残りの分は、製本方式を知るためのサンプルとして残してある。これなら壊れていても好都合。それにしても、この綴じ方では壊れても仕方がない。六〇〇ページ余の大冊だが、どう繕いても必ず壊れるはずだ。名訳と素敵なお挿画につられて一気に読んでしまうが、従って本は壊れざるを得ないという次第。この頃まで本の仕立て方はあまり定まらなかったのだろうか？ 本誌七六号で紹介した漱石の『猫』とほぼ同時期の刊行で、まるでこれに対抗しているかのような意気込みすら感じさせるのだが、大冊なのに和本のようない三つ目綴じ仕立て。あまりノドシロもとつてないので、壊すなというほうが無理。明治二〇年代に大いに流行ったボール表紙本と同じような製本方式なのだが、これでは五センチもある束は到底持ち堪えられない。

私は落丁を補った一冊を、丈夫な背かがり本に仕立直してから通読した。各折丁は律儀に一六ページ単位に区切られているから、糸かがりにするのは何ら不都合はないのだが、別丁の挿画は話の筋にそつて不規則に挿入されている。製本師泣かせというか、今日ではあり得ない造本だが、「昔の職人はよーやった！」と感動するしかない。

特
集

大学からの発信、
大学出版からの発信

大学の未来、人文学の未来

—— 亀山郁夫・東京外国語大学学長に聞く

【解説】 亀山郁夫氏は、一九四九年生まれ、二〇〇七年より東京外国語大学学長を務める。ロシア文学者としての業績は改めて紹介するまでもないが、ドストエフスキ―『カラマーゾフの兄弟』（全五巻、光文社古典新訳文庫）新訳の刊行がもたらした反響は、文学の枠を越えて社会的な話題となったことは記憶に新しい。

むしろここで特筆しておきたいのは、学長としての大局的立場から発する、学問や大学についての展望と提言である。「人文系大学と人文学の将来について」（『現代思想』二〇〇八年九月号）、「大学に未来を」（『現代思想』二〇〇九年十一月号）、「世代間の戦いとしての教養」（『學

燈』二〇一〇年春号）、これらはいずれも具体例を交えて現在の課題と将来のビジョンを明快に打ち立てており、今後の方向性を考えるうえでひとつの指針を与えるものとなっている。

今回のインタビューは、学長であると同時に東京外国語大学出版会創立者の立場から、大学と大学出版、教養知と人文学について語っていた。情熱溢れる、しかも極めて理路整然とした話のなかには、示唆に富む論点が散りばめられていると思う。読者の皆様の参考になれば幸いである。

（聞き手・構成 東京大学出版会・山田秀樹）

東京外国語大学出版会を創立する

東京外国語大学出版会は、一年の準備期間を経て二〇〇八年に設立されました。外語大であれば有力な研究者は既存の出版社から本を出せる状況にもかかわらず、

出版不況が叫ばれ前途多難が予想されるなか、それでも出版会を設立した理由をお聞かせください。

私が一教員として勤めていたとき、研究者として世に問

いた本がありました。私が関心をもっていったのはスターリン時代の文化ですが、それなりにアクチュアリティのあるテーマだと思いつつ、それを出版に結びつけることが非常に難しい状況に立たされていたのです。それが、九〇年代の終わりから二〇〇〇年の初めにかけて、私自身が置かれていた状況です。そのようななか、自身の大学出版会から出版助成を受けて見事な本を出している友人たちを見て、とても羨ましく感じました。そうありたいという願いが、出版会設立への原点になっています。

二〇〇一、二年頃から大学出版会をつくりたいという思いがあり、まったくの任意団体として、いちど出版会を立ち上げたことがあります。大きな夢を抱いて始めたのですが、学内のサポートがほとんど得られないまま、結局のところは、『大学史』の普及版の販売にすべての労力が費やされてしまいました。



そのとき実現できなかったことに、学長になると同時に着手したいと思いました。当然のことながら、先行きを不安視する声もありました。しかし、空前の出版不況といわれるなかで、優れた学術書は確実に出版されているのです。値段は高くなっても出るべき本は出ているのです。そこで外語大が取り組むかたちとして、最初は、出版事業そのものよりも出版助成という仕組みを考えました。ひとつの企画に対し、五〇万から一〇〇万円近い助成金を出版社に提供して出版を実現し、外語大の助成を受けた旨をあとかぎで一行書いていただく。そのような方法を模索して大学の会計課と協議したのですが、既存の出版社からの刊行はむしろ非常に高くつくことが分かったのです。

それならば、自前で出版局をつくった方がいいのではなにかということになりました。他の大学でも運営費交付金を使ってお酒やお菓子を売るなど行っていますが、我々は東京にある人文系の大学の誇りとして、そのような物の代わりに出版事業を広報の一環としてやろう、と。広報の一環として行うのであれば、学内的にもコンセンサスが得られやすいと思ったのです。実際は、運営費交付金が毎年一%カットされる状況のなかで、その一部を使うことに学内から、少なからず危惧する声があったのですが。

いまは、ほぼ教員一人分の人件費を、出版経費と編集者の人件費などの運営費に当てていますが、これは何よりも大学のプレゼンスを向上させることを大前提としての取り

組みです。一九九〇年代の外語大の発信力はかなりのものでしたが、朝日新聞社から出ている大学ランキングでの調査などにも見られるように、二〇〇〇年に入ってから明らかに研究・情報発信力が落ちていました。今後の状況次第では、出版につながる大学の成果はなくなるのではないかという危機感を抱きました。大学全体の発信力の強化に近づきたいということも、大きな動機となりました。

——国立大学法人化が一つの契機となったのでしょうか。

むろん、そのとおりです。法人化されなければ、学内の組織として出版会をつくることは不可能でした。法人化以前に出版会をつくったところは、大学の外につくらざるを得なかったわけです。私たちは収益を前提としてでなく、最大限、出版経費と人件費が回収できればよいと考えています。仮に半分しか回収できない場合でも、残りの半分は大学のプレゼンスを上げるための、言わば広報の費用として位置づけることにしているのです。

出版会を立ち上げる際には、大学の教授会に諮り投票も行いました。その結果、六割五分の教員の方々が賛同してくれたこともあり、一応船出できたのです。一年目の成績はまあまあでしたが、二年目以降はそうはいかないだろう、半分回収できればいいぐらいと、かなり厳しく見積もって

います。

——設立までで一番苦労したことは何でしょうか。

運営費交付金を使うことに対して、学内コンセンサスを得ることでした。外語大の場合、教員と学生数の割合が著しくアンバランスで、日本でも最低レベルです。そのような状況のなか、人件費がないわけです。出版会の年間運営費は、講義で換算しますと約一六、七コマ分に当たりますから、一六、七コマあれば、授業カリキュラムにも有効な使い方ができます。それを考えると、出版は大学の教育と研究に直接リンクしているわけではありませんから、学内のコンセンサスが得られるかどうか不安でした。

ですから、出版物の質がよくなかったり、自分自身の研究成果をストレートにぶつけず趣味的なもの出版になったのはダメだと思い、信頼する岩崎稔さんに編集長をお願いしたのでです。

一年数ヶ月のあいだに五冊刊行し、いまは企画が目白押しですので、そのなかのどれを出版物として取捨選択していくのか検討しています。一年目は人件費と出版経費をほぼ回収できましたので、ほっと胸をなで下ろしているところですが、でも二年目以降が勝負ですね。

大学の教授会に対する約束は、五年後に検証し見直すということです。五年後に不振であれば、出版事業は行わな

いいという選択肢も残すことで承認をとりました。その学内
コンセンサスを取りつけるのが、一番大変でした。

出版活動二年目に思うこと

—— 昨年の春に Pieria Books 一点を含む三点を刊行し
て出版会がスタートしましたが、プロの編集者がスタッ
フになったこともあり、内容といい、造本といい、洗練
されていると思いました。創立記念シンポジウムも華や
かに行われるなど、よい雰囲気です。スタートしたように受
け止めておられます。

スタートから一年が経った現時点で、どのようなこと
を感じていますか。

まだ毛が生えた程度の出版会ですから、何ひとつ誇るべ
きものはありません。ただ、いまお話ししましたように、
本づくりに関して徹底してこだわりを追求すること、出せ
ばいいのではなく、ひとつひとつ質感・存在感ある本づく

りをすることに心がけました。プロの編集者にやっていた
だくことで、そのひな型をつくれたことは非常に大きいと
思います。そこで躓くと、次の執筆者の意欲が削がれてし
まうことがありますから。

—— 大学内外の反応、感触はいかがですか。

まだ僅かな出版点数ですから、学外の反応はゼロに等し
いと思います。しかし学内では徐々に関心が高まって、自
分たちの研究成果なり翻訳なりを、外語大の出版会から出
そうという先生方が増えています。その面では岩崎さんも
安心しているようです。

—— さきほどの話にもなりますが、徐々に落ちていた外
語大の発信力を、出版会の設立を起爆剤にしてふたたび
取り戻しつつあるということですね。

沖縄の自己決定権

喜納昌吉著

すべての武器を楽器に、すべての基地を花園に、そして、すべての人の心に花を——

地球の涙に虹がかかるまで

今夏、参議院改選を目前にして、迷走する普天間基地移設問題に「平和の哲学」をもつ挑みつける喜納昌吉のいまを追う。基地の街に生まれ育ち、音楽家として
世界のステージに立ち、沖縄市民運動の最前線を駆け抜けた激動の半生をふりかえりつつ、「先住民族の祝祭に学ぶ政治」「国境主義からの脱却」「国連環太平洋本
部の沖縄誘致」、そして「沖縄の独立」までも見据える人類共生のビジョンを熱く訴える、はじめの語り下ろし。

◆ 一四七〇円

 未来社 〒112-0002
東京都文京区小石川3-7-2
tel 03-3814-5521
<http://www.miraisha.co.jp/>
★出版図書目録無料進呈いたします★
※価格は税込



人文学の未来、大学の未来

—— つづいて、外語大が拠って立つところの人文学についてお聞きしたいと思います。先生は人文社会系大学の長として、「科学技術創造立国」に對置し「地球教養創造立国」を提唱されています。人文学および教養なるものの今後のあり方を、大学一般あるいは外語大の将来展望、そのなかでの出版活動の展望も踏まえつつ、お聞かせください。

大事な問題ですね。私は、人文学というのは教養の根底をつくるものだと考えています。人間の学問的知性を形づくるものとしては、自然科学、人文科学、社会科学がありますが、人間の学としての根本的な部分のなかに、やはり人文学がしっかりとあるはずだという信念のもと、人文学の将来を考えているのです。

ただ、発信しても受け手がいない以上は無と考えざるを得ませんから、その行き詰まりを打破しなくてはなりません。すべての教科書、すべての本につき、読者の手に取るための努力と、手に取る人たちの教養とメンタリティーの根本的な向上を図らなければ、すべての出版事業は終わると思います。

文明論になってしまいますが、電車に乗って、目の前の全員がケータイをやっている風景を見るたびに、ああ、日本は終わった、と思ってしまう。全員ケータイを見つ

そうです。大学が盛り上がってきたと思うのです。

著書・翻訳書問わず、自分たちの出版会から本を出すとすることが、何か後ろ向きな意味ではなく、むしろそれと光栄と感じられるぐらいのブランド性を最初につくりたいと思います。その面で今福龍太さん、柴田勝二さんのお二人が先頭を切って書いてくれたのは、とてもラッキーでした。また思いがけないヒット作も生まれました。それが『直接法で教える日本語』です。

—— 大学の発信力を、大学と出版が連携するかたちで強化するということですね。

めていて、本など読んでいないという最近の光景。昔は読書している人を見かけたのに、それがいいのです。モスクワの地下鉄などに乗ると、分厚い本を読んでいる人が結構います。日本の場合、知的な、基礎的な体力が根本的に脆弱化している気がします。キンドルやiPadがどこまで文化を救えるかみものですね。

そのようなわけで、人文学の将来に対する危機感が強いのですが、一番絶望しているのは、むしろ教員に対してです(笑)。専門が何であれ、教員が自信をもって学生たちに語りかけていくには、教養が欠かせません。たとえば、哲学の講義の最中に、「先生、『罪と罰』読んだことありますか」って聞かれて、何も答えられないという状況は、今の大学なら、どこでも起こりうるのではないのでしょうか。専門バカになってはいけません。専門バカになれないのも困りますけれど(笑)。しかし、実態として、ほとんどの教員は、ある時点から自分の専門以外の本は読まなくなりません。小説も読まない、教養書も読まない、ドストエフスキーも読まない(笑)。べつにドストエフスキーだからと言うのではないのですが(笑)、たとえば、ドストエフスキーに象徴される教養知というものを広く共有しつつ、研究者になり、大学の現場に立ち、教育に携わるというプロセスがなくなったことは、嘆かわしいことです。

ですから、まずは大学の現場に立っている先生がもう少し目を開き、自分の研究の狭いところにとらわれず買っ

き本は買い、読み、たとえ読まなくてもいいから知的なものを共有するつもりで、せめて何が書いてあるか想像するぐらいはしてほしいと思います。

ただ、教養というのはどうかたちでもよいと思いません。つまり、シエイクスピア、ゲーテ、ドストエフスキーなど文学的なもの、あるいは言語学の基本的な知識など、何でもよいのですが、それぞれの時代のコアとなる教養は永遠のものではないのです。我々より上の世代は、教養というものに無前提的にある種の価値を置きがちなのですが、教養の根本的な意味は何かということをもう一度問い直さなくてはなりません。新しい時代の教養は、このグローバル化時代において、グローバルイズムの根本や新しい世界を認識するための方策を身につけさせることでしようし、その上に芸術など文化的なものを積み上げることも大事です。

最近、文科省の政務三役との懇談会で、日本が生き延びるための国家教育戦略のもとでの人文学の再興という話をしました。人文学の使命として、大学の教員は、最終的には大学の現場で教養として伝えられるところまで責任を持たなければだめなのですが、それを伝えるためには、聴衆を前にほそほと話しているだけでは全然だめです。常に自身の学問を、きちんと使命感を持って語ることから始めなくてはならないのです。

教養の担い手という点から言いますと、一年半前、文科

省で出版助成について議論した際、私は日本における最高の知性の持ち主は編集者であると断言しました。編集者というのは、かなり幅広い分野に目配りし、他者の言語を正確に読み取り、それを伝えていくわけです。この、最高の知性ともいえる編集者の人たちが近視眼的な視点から駆逐するのはやめましょう、と。教養の伝達者としての役割を編集者に任せてしまっていることは反省すべきですが、編集を介した出版事業をとおして教養知が拡がることも期待したいです。

——教養の中身は常々変わりうるということですが、新しい教養を学生や社会に提供するための、大学の方策はあるのでしょうか。

それは私が一人で解決できるような、あるいは答えが出せるような問題ではありません。私は、ソビエト時代を長く見てきたので、全体主義的システムのなかでの教育の現実を知っていますが、そこで行われた教育というのは奇妙な言い方ですが、それこそが、いま流行のいわゆる「選択と集中」なのですね。つまり西側の害悪をはねのけるために情報を局限し、西側の良質のものだけを取り入れ、そして自国のロシアないしソビエトという文化のなかで育ってきたものをうまくミックスさせる。余計な知識はいっさい入れない。これが一九三〇年代から始まった、ソビエトに

おける人文学教育のモデルです。

いまの日本は完全に混沌としています。指針がない。結局、教育面でのある種の統制は高校までしか効かないわけです。九一年の大綱化以降の大学では、ある種の枠を決めてそのなかで基本部分の勉強を促すことがなくなってしまうので、入学した途端に専門教育に追い込んでしまうところがあります。大綱化以前の枠組みがよかつたとは思いませんが、やはり教育上の規範というものをそれぞれの大学が自らの責任において持つべきだと思います。もちろん、高校教育と同じかたちで国が規範化づくりをするのは危険です。しかし、大学はそれぞれの役割に応じて、自分たちの大学における教養のモデルというものを、人材育成に絡めてつくれると思います。日本全国の大学生が同じ教養を身に付ける必要はなく、当然凹凸があるわけです。

ですから、それぞれの大学が教養戦略というものをきちんと打ち出すことが求められます。ただ、教養にはお金がかかるんですよ。教員の配置というところで無駄を持たせることになりましたから。

私はいま「二一世紀地球教養」を唱えています。これは外語大モデルの教養なのです。自然科学にまで及ぶ知ではありませんが、それでも一部は取り込んで、外語大モデルのコンテンツをつくるべきだと思います。

ただ、教養は常識とは違います。つまり、クイズグランプリではないのです。グランプリの覇者が、大変な教養の

生物多様性(喪失)の真実

熱帯雨林破壊の
ポリティカル・エコロジー

ヴァンダーミーア他 待望のポリティカル・エコロジー入門書。熱帯林と先進国を繋ぐ環境破壊ネットワーク。新島義昭訳 ¥2940

進化論の時代

ウォレス=ダーウィン往復書簡

新妻昭夫 自然選択説連名発表前から四半世紀、真摯な手紙で互いの理論の完成をめざした二人と「進化論の時代」を解説。¥7140

歴史と記憶の抗争

「戦後日本」の現在

ハルトウニアン なぜ「戦後」は終わらないのか。米国の日本研究の問題点は？ 靖国問題他 8編。K・M・エンドウ編・監訳 ¥5040

イタリア的カテゴリー

詩学序説

アガンベン イタリア文化／文学を支える諸カテゴリーを明るみにし、詩的なるものをめぐり思考を展開。岡田温司監訳 ¥4200

レヴィ=ストロース 神話論理 IV-2

裸の人²

南北アメリカ 800 余篇の神話世界に、自他を問う人類の「野生の思考」を聴きとる浩瀚なライフワーク。吉田・渡辺他訳 ¥8925

『神話論理』邦訳全 5 冊・完結]

I 生のもとの火を通したもの 早水洋太郎訳 ¥8400/II 蜜から灰へ 早水洋太郎訳 ¥8820/III 食卓作法の起源 渡辺公三他訳 ¥9030/IV-1 裸の人 1 吉田禎吾・木村秀雄他訳 ¥8400

東京文京本郷

5丁目 32-21 **みすず書房**

tel. 3814-0131 fax 3818-6435 (税込)

http://www.mszz.co.jp

持ち主ではあってもです。細部に至るまでの知識を大量に持っている人間と、それほど多くの知識を持たなくても、それなりに幅広い世界、自然社会に対して洞察を持てる人間とは、違うと思うのです。その二つのタイプのなかで、人文学が育てるべきは後者なんです。ね。

本も、濫読する必要はありません。ただ、本の内容に深く入り込み、追経験する必要があるので。その「経験」というものをできる人間を育てるにはどうしたらよいか。もちろん、物事を批判的に捉え、世界を客観的に分節化する知性を育むことも大事ですが、同時に人文学が育むべきは、共感的に世界を見る能力だと思えます。批判的な知は、いずれ行き詰まります。私は、人間的な経験を積み重ねる前に、一種の情操教育といえますか、音楽とか美術などへ上手に誘うと、大学に入ってから自分自身のイマジネーションに重ねてゆたかな人生経験や社会経験ができるようになるかと信じています。

根本的な情念の豊かさを身につける教育システムはどうなるか。

そうです。外語大の学生や卒業生は海外に出ています。世界で共有される知というのは、やはり情念的な裏づけを持った知性だと思えます。ただ単に知識を交換するというタイプの知は、国際社会の現場ではあまり役に立ち

——古典的ということですが、そのような教養のあり方が、亀山先生が目指すところの外語大における教養なのでしょうか。

あるべきかを考える際に、ソビエト時代の人たちの素晴らしいメンタリティーを記憶している私としては、どうしてもこれを参考にしたいです。その意味では、かなり古典的です。ただ、その知の涵養は、国ではなくて大学が責任を持つてやるべきだと思うのです。それぞれの大学における教養知のモデルが、国立大学法人に欠落している「建学の精神」の代替をなすような時代が来るといいなと思います。

せん。私がイメージするのは、大雑把でいいけれども、根本的に物事に共感できる人間の豊かな豊かさがあり、その上に世界に関する基本的な知識を積み上げ、さらにそのなかのいくつかを深く体験するという、そういうかたちですね。

大学出版会への期待を込めて

——最後に、外語大出版会の今後の展望についてお聞かせください。また、日本の大学出版会全体について、感じていらっしゃることや期待などをお聞かせください。

大学にはそれぞれ大学のミッションがありますが、私自身は「世界知の蓄積、地球社会との協働」という言葉を掲げていますので、いかにして、蓄積された多様な世界知を外部に見せていくかが、外語大出版会の使命だと思います。そのうえで、大学という教育・研究の現場の基本は肉声であることを再確認し、肉声であることの意味の根本的な見直しを行うべきだと思います。その肉声の延長にある出版物という捉え方なわけで、声が聞こえてくる出版物というように私はイメージしています。世界の多様性を伝えるという意味では、語学教科書も外語大の知性と教養に裏打ちされた新しい教科書を出せばよいですし、商業出版社ではなかなか出にくい少数言語の貴重な教科書をきちんとつくっていくべきだと思います。

あと、いまは世界の文学の翻訳が全く売れなくなってい

るので、古典とはいわなくても、主としてアジアの近現代の優れた文学を地道に刊行していきたいというのが、私の夢です。西欧とかアメリカとかメジャーなところは大手出版社に任せるけれども、採算が成り立たないところを、我々が「世界知の蓄積」という使命に照らしてきちんと紹介していくことですね。

大学出版会の将来について大それたことは言えませんが、それぞれの大学のモラルと精神をしっかり伝えていくような本づくりを期待します。最近は大学出版会も採算を厳しく問われているのですが、やはり学問的な価値や社会的な有用性があって大きな特色を持つ作品については、それぞれの大学出版会の見識に従って、商業ベースとは異なる見地からしっかりと本を出すべきだと思います。

オープン化する教育と学術出版のゆくえ

—— アメリカにおける取り組み

飯吉 透 (マサチューセッツ工科大学)

オープンな学術出版にまつわる個人的な体験

オープンエデュケーション・ムーブメントをテーマとした拙編著書「Opening Up Education」がMIT出版 (<http://mitpress.mit.edu>) から刊行されたのは、二〇〇八年秋のことだった。MITの「オープンコースウェア」プロジェクトに代表されるような、世界的に拡がりをみせている教育のオープン化によって、教育の抱える様々な課題はどのように解決され、教育はどのように進展する可能性があるのかを模索し、将来に向けた提言を行う、というのが本書の趣旨であった。「教育テクノロジー」「教材」「教育実践知」という三領域におけるオープン化について、欧米の三十八人のオープンエデュケーション分野におけるリーダーや専門家たちに執筆いただいた。

これは私にとって、当時勤務していた米カーネギー教育

振興財団（以後、「カーネギー財団」と略）で丸二年間を費やして手掛けた最後の大仕事となったが、その最大の難関は、「この五〇〇ページに及ぶ書籍を、どのように出版するか」ということだった。私をはじめ、他の編著者やこの書籍プロジェクトに関わった全ての人々は、オープンエデュケーションの黎明期における試みから得られた、知見の集大成とも言える本書を、誰もが無料で入手できるオープンな形で出版したいと強く願っていた。当時、カーネギー財団のプロジェクトとして出版される書籍のほとんどは、アメリカの大手学術出版社の一つである「Jossey-Bass」から出版されることが慣例となっていたのだが、同出版社にこのアイデアについて打診したところ、大方の予想通り、「商業出版社としては、そのような形での出版は考えられない」と、即座に断られてしまい取り付く島もなかった。

結局、紆余曲折を経て、最後に「やりましょう」と手を

挙げてくれたのは、M I T 出版だったが、同出版と本書の著者たちとの「喧喧諤諤」の相談と交渉は、数週間以上に及んだ。その結果、無料の電子書籍としては、クリエイティブ・コモンズを利用し、インターネットなどを通じた自由な頒布を可能とし、また印刷された通常の有料書籍としては、著作権は各著者とカーネギー財団に帰属し、書籍としての出版権はM I T 出版に帰属させる、ということでの折合いがついた。

当然のことながら、この実験的な学術出版の試みについて、M I T 出版とカーネギー財団双方の関心事は、「このような形での学術書籍の出版が、ビジネスモデルとして成り立つのかどうか」ということであった。「電子書籍として無料で頒布されるものが、本当に紙媒体書籍として購入されるのか」という問いに対し、本書の刊行後約一年半を経た現時点での答えは、非常に肯定的なものだ。本書の通常書籍としての売れ行きは予想を遙かに超え好調（米アマゾンでは、「教育」テクノロジーと遠隔教育」カテゴリで、最高一位を記録）で、その結果を受けて、M I T 出版は今年の夏には、本書のペーパーバック版を刊行することを決定した。この実験的試行では、当初の予想通り、紙媒体書籍の実売部数より、無料の電子書籍版のダウンロード数やオンライン上での閲覧数は遙かに多かったものの、M I T 出版は、本書に関しては、無料の電子版によって、紙媒体版の売り上げが圧迫されたとは考えておらず、むしろ電子

版を無料で頒布したことが、紙媒体版の販売促進に繋がったと分析している。

もちろん、私にとって卑近なこの例一つを取り上げて、このような学術出版のアプローチが「正しい」とか「妥当だ」と主張するつもりはない。しかし少なくとも、アメリカの主だった助成財団・研究財団の中には、このような形による学術出版を推進しようとする動きが見られるのも、また事実だ。例えば、マッカーサー財団は、同財団の助成プログラムを通じて行われた「デジタルメディアと学習」に関する様々な研究の成果をM I T 出版を通してシリーズ化し、紙媒体版は有料の書籍として、電子版は無料で頒布を行っており、現在までに一四冊の書籍が刊行された。また、メロン財団は、同財団の助成によって行われた人文科学・社会科学・テクノロジー分野の研究に関する出版物を、電子書籍として、ライス大学によって運営されているConnectionsを通して頒布している。

オープンな電子出版プラットフォームによる 大学出版局の再生

このConnections (<http://cnx.org>) は、現在のアメリカの高等教育界におけるオープンな電子出版のための最大のプラットフォームで、二〇〇〇年にテキサス州の名門私立大学として知られるライス大学で始まった。Connections がプロジェクトとして立ち上げられる発端となったのは、



歴史文化 ライブラリー

通巻300冊達成!

300 近世の仏教

華ひらく思想と文化

末木文美士著 近世はほんとうに
儒教の時代だったのか? 仏教史
の新境地を切り拓く。1785円

299 鎌倉源氏三代記

一門・重臣と源家将軍

永井 晋著 1890円

298 博覧会と明治の日本

國 雄行著 1785円

297 古代壁画の世界

高松塚・キトラ・法隆寺金堂

百橋明穂著 1785円

296 昭和天皇側近たちの戦争

茶谷誠一著 1785円

295 鎌倉大仏の謎

塩澤寛樹著 1890円

294 邪馬台国の滅亡

大和天孫の征服戦争

若井敏明著 1785円

293 O脚だったかもしれない

縄文人 人骨は語る

谷畑美帆著 1785円

292 (近代沖縄)の知識人

鳥袋全発の軌跡

屋嘉比 取著 1785円

291 白村江の真実

新羅王・金春秋の策略

中村修也著 1995円

290 「国語」という呪縛

国語から日本語へ、そして〇〇語へ

川口 良・角田史幸著 1785円

289 幕末日本と対外戦争の

危機 下関戦争の舞台裏

保谷 徹著 1785円

吉川弘文館

〒113-0033・東京文京区本郷7-2-8

電話03-3813-9151 / 価格5%税込

http://www.yoshikawa-k.co.jp/

同大学の工学部教授リチャード・バラニックと他大学の同僚たちが、「自分たちが講義に使いたいような、最新の内容を網羅した工学分野の良い教科書が不足している」という不満であった。

彼らは互いに協力して、自らの手による新しい教科書の執筆に取り掛かったのだが、その過程において、「教科書を章や節などのモジュール単位で、無料で共有できるオンラインプラットフォームがあれば便利だ」ということになり、Connectionsの原型となるシステムの開発が始まった。

現在、Connectionsのウェブサイトでは、教科書のモジュールを作成するための様々なオンライン・オーサリングツールが提供されており、教員は新しいモジュールを作成すると直ちに公開することができる。同ウェブサイトでは、世界中の大学や高等学校の教員などによって作られた様々な学問分野の教科書モジュールが、既に一万六千点以上も公開されており、その数は増え続けている。

さらに教員や学生は、これらの教科書のモジュールの中

から、自分たちが使いたいものを幾つか選び出し、自由にミックスすることが可能だ。このように、Connectionsのウェブサイトでカスタマイズされた教科書は、電子版としてダウンロードしたり、オンデマンド印刷サービス(OOP)を通じて、オンラインで注文した部数だけ製本したものを、数日以内に郵送で送ってもらうことができる。印刷や製本代などは多少費用がかかるが、教科書のコンテンツ自体はオープンソースで無料であり、教員や学生のニーズに合った内容の教科書が、いつでも必要な時に安価に入手可能にしたという点で、Connectionsは、教科書出版に革命をもたらしたと言えるだろう。

また、Connectionsは、より質の高いオープン・テキストブックが利用者の手に渡るように、収録されている教科書や教科書のモジュールを各学問分野における様々な学会や学術団体が推薦したり認定することができる。「LENS」と呼ばれる仕組みを考案した。さらに、教科書やモジュールの作成や利用について共通の関心を持つ教員や学生がア

アイデアや意見を交換するための、オンラインコミュニティも同サイト上に設けられており、教材の質的向上に貢献している。

一九九六年に財政的な理由などによって閉鎖されたライズ大学の大学出版局は、この Connexions の登場によって、二〇〇六年に再生されることになった。「Connexions によって」ライズ大学出版局は、新しいメディアを利用した学術出版の新たな形を生み出しただけでなく、思索や議論の新たなモードを探究することが可能になった。我々は、既存の学問分野における伝統的な学術出版と同時に、未知の領域における学術的探究を進展させるために、形態とコンテンツの双方において、新しい学際的な学術出版に取り組みたい」と同出版局のウェブサイトで述べられているように、この大学出版における新進気鋭の試みは、「二一世紀のネットワーク時代における新たな学術出版の使命と在り方」の確立を目指した果敢な挑戦として、大いに注目を集めている。

教育におけるパラダイムシフトと学術出版の未来

Connexions のような学術出版や教科書出版のオープン化の動きは、持続可能な学術出版のビジネスモデルの模索という観点からとても興味深いものだが、その背景には、アメリカ国内における「教科書や学術書の高価格化」という大きな問題がある。大学の講義で使われている教科書を

例にとってみれば、日本円に換算して五千円前後のものは当たり前であり、中には一万円以上するものもある。授業料よりも教科書代の方が高くつくため、地元のコミュニティ・カレッジ（日本の公立短大に相当）に通いたくても、経済的な理由で通えない学生が多い、というような話もよく聞かれる。アメリカの大学生は、教科書代として一年間に平均して約一〇万円以上を費やしていると言われ、さらにアメリカ政府の調査によって、二〇〇二年から二〇〇七年にかけての五年間に、大学の教科書の値段は四〇パーセントも値上がりしたことが判明した。

このような状況の中、多くの大学生は、大学生協などで売られている中古の教科書を買って利用することを余儀なくされている。このように教科書の再利用が進むことで、新本の教科書の売れ行きが停滞し、これがさらなる教科書価格の高騰を招く、という悪循環が続く。さらに、新しい版の教科書が刊行されていても、学生は安価な旧版の中古教科書を使い続けるため、最新の教育コンテンツが学生に届かない、という問題も深刻だ。

このような様々な問題の解決を目指すため、例えば、「ウェブ上で電子教科書を無料で配布しつつ、製本された版や教科書に関連する補助教材から得られる利益の一部を、直接著者に還元する」という新しいビジネスモデルと共に教科書業界に参入してきた Flat World Knowledge (<http://www.flatworldknowledge.com>) のようなベンチャー教科

書出版社も登場し始めている。このモデルは、Connectionsのように、「著者は、原則的に教科書や学術書を無償で執筆する」というモデルと比べ、従来の印税という形ではないにせよ、著者も出版社側も収入を得られるという点で注目されている。同社は、現時点で、投資家から約七億円の資金を集めており、既に百校以上の大学と提携を進めている。

本論考では、アメリカにおける学術出版のオープン化の動向の一部を、私自身の経験や考察と共に紹介してきた。学問分野の細分化や再統合化が一層進み、教育の多様化・個人対応化が求められる中で、研究や教育のさらなる進展を考えた時、このような学術出版のオープン化や低コスト化は、学術出版・教科書出版の「ロングテール化」に対応するための基盤整備に向けた欠くことのできない必要条件だ、と私は考える。

ロングテールとは、よく知られているように、米ワイヤード誌の編集長クリス・アンダーソン氏が、アマゾンのようなオンラインストアが、「少量しか売れない製品を多種取り揃えて販売することによって、大量に売れる人気商品を少種販売するのに匹敵する利益を挙げる」という、新たなネットビジネスのモデルを説明するために提唱した概念だ。勿論、ここで私が主張しているロングテールの重要性は、収益モデルではなく、教育の大きなパラダイム転換にある。二〇世紀型の教育モデルの基本が「少種多量」だと

すると、めまぐるしい社会の変化や様々なニーズに対応するための二一世紀型の教育モデルは必然的に「多種少量」、つまりロングテールモデルに基づかなくてはならないからだ。

「研究や教育のための必要な知識や情報を、必要な人に、必要な形で、より効果的に、より迅速に、より安価に提供できるかどうか」が、二一世紀の学術出版界に与えられた最大の課題であり、進化し続ける情報・コミュニケーション技術の戦略的な活用なくしては、学術出版の未来を切り拓くことはできない。

二十世紀懷徳堂とアウトリーチ活動について——大阪大学が目指す社会学連携活動

小澤洋子

(大阪大学二十世紀懷徳堂特別研究員)

二十一世紀懷徳堂の誕生

二〇〇八年四月、大阪大学豊中キャンパス内の登録文化財であるイ号館（旧制府立浪速高等学校本館）内に、地域と社会、市民と大学をつなぐ社会学連携活動を担う組織として二十一世紀懷徳堂が設置されました。社会学連携という言葉は、いまでこそ様々な大学でその言葉を耳にすることが多くなりましたが、最初にこの言葉を使い始めたのは大阪大学だと聞いています。

「地域に生き世界に伸びる」をスローガンに掲げる本学は、地域・社会との密接な連携を重要な使命の一つにとらえています。それは、二〇〇三年に制定された十一項目からなる大阪大学憲章の中で、社会への貢献、学問の独立性と市民性、実学の重視などの項目が謳われていることや、第十六代鷺田清一大阪大学総長が学内外に示された「大阪

大学の新世紀——大阪大学グラウンドプラン」の冒頭に

「大阪大学は、江戸期に大坂の地に創設された適塾（一八三八年）を原点とし、さらに遡って大坂の五商人によって開設された懷徳堂（一七二四年）の精神を汲みつつ、学術と教育の機関として発展してきた。大阪大学は、この藩校ではない市民による市民のための二つの学問所を精神的な源流としており、そのことを大きな誇りとしている。」

と書かれていることから、「社会に開かれた学府」として研究・教育成果を世に問う大学であるというアイデンティティが示されていると思います。それはまた、本学が大阪市民からの強い要望により創設された帝国大学という経緯にも大いに起因していると思います。

懐徳堂から二十一世紀懐徳堂へ

懐徳堂は、江戸時代の後半約一四〇年にわたって大坂の文化と学術の発展に寄与し、江戸の昌平坂学問所にも並ぶ隆盛を誇ったと聞いています。また、当時の大坂は町人の力が強く、自らが学ぶための学問所を作り上げ、当時の伝統的な儒教道徳を背景としながらかなり自由な精神で塾が運営されていたようです。席次なども武家方と町人の区別はなく、また貴賤貧富を問わず同輩とする考え方は当時としては画期的なものであったようですが、それは江戸ではなく、大坂の地であったからこそ実現できたことなのでしょう。そうした精神は、明治から大正にかけての懐徳堂記念会の動きへとつながり、一九一六年には「重建懐徳堂」として学舎が復興されました。

この当時は大阪帝国大学が誕生する前であり、この重建懐徳堂が市民のための文化系の大学の役割を果たしていたようです。しかし、その重建懐徳堂が一九四五年の大阪大

空襲により焼失してしまいました。しかし、奇跡的に戦火を免れた懐徳堂の貴重な資料は、その後大阪大学に寄贈されるにいたりました。二〇〇一年に創立七〇周年を迎えた本学は、江戸時代の懐徳堂学舎のCGを制作し、貴重な資料のデータベースをインターネット上で公開しています。それらは、懐徳堂研究の総合サイト「Web懐徳堂」に公開されています (<http://kaitokudo.jp/>)。二十一世紀懐徳堂は、そうした懐徳堂の精神を二十一世紀に引き継ぎ、本学が持つ知の資源を広く社会に還元することを目的に設立されました。

市民と大学をつなぐ活動へ

次に、二十一世紀懐徳堂はどんな活動をしているのかを紹介したいと思います。一言でいうと、市民と大学を「知」でつなぐ活動と言えるかもしれません。市民と大学がともに学ぶ場として、また「地域に生き世界に伸びる」を具現化するための場として、大学が持つ「知の資源」をどう社

村田良平著 元駐米大使、若人への遺言

何処へ行くのか、この国は

村田良平回想録

【上】戦いに敗れし国に任せて、【下】祖国の再生を次世代に託して

四六判上製260頁
2100円
各2940円

人間に格はない

女田有史著 ● 石川経夫と2000年代の労働市場

〈生政治〉の哲学

金森修著 〈生政治〈生権力〉の射程と浸潤の意味を問う。〉

エッセー 正・徳・善

塩野谷祐一著 ● 経済を「投止」する経済のあるべき姿を描く全42篇。3150円

焚書坑儒のすすめ

西部邁著 ● エコノミストの恣意を思惟して

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL 075-581-0296 FAX 075-581-0589
価格税込 <http://www.minervashobo.co.jp/>

会に還元していくのか、多様な社会のニーズに対して大学が提供可能なシーズとは何かを考え、そのマッチングをすること、そこから多様な形で出力していくことを、学内はもとより自治体、企業、市民の方々と協力して実施していくことがその役割だという表現もできるでしょう。

具体的な活動内容を見てみると、その代表的な活動の一つに公開講座の企画・運営があります。社会人講座として四十二年の歴史を誇る「大阪大学中之島講座」から、「Handai-Asahi-中之島塾」「二十一世紀懷徳堂・i-spot 講座」など、大阪市などの自治体及び民間団体と共催でおこなうものまで、年間を通して多くの市民の方に、それぞれの求める「学び」を提供しています。その中でも少しユニークな講座として紹介したいのが、大阪市の計画調整局と共催で実施している「二十一世紀懷徳堂・i-spot 講座」があります。ここでは、「まちづくり」を基本コンセプトに、医学から文学、哲学、歴史、工学など幅広い専門分野の若手教員が、まさに市民とひざを突き合わせながら（定員三〇名）「学び合う」をテーマに無料の市民講座を展開しています。あるときの「懷徳堂の歴史」の講座では、市民の方から新たな史実の一端が紹介されたり、大阪の歴史における解釈をめぐって講師と受講者が立場の枠を超えて議論し合うなど、先人の「懷徳堂」を彷彿とさせるものがあります。もう一つの活動は、二十一世紀懷徳堂の主催のみならず、本学の部局や学術総合博物館などとともに、講演会やフオ

ラム、シンポジウムなどを共催で企画・実施することです。社会が今、何を大学に求めているかを察知するため、学内の関係部局とともに協議し、どのような形でアウトプットしていくか、どうすれば多くの市民の方へ届けることができるのかについて知恵を出し合い、一つのイベントとして実施していきます。そこで求められているのは、常に市民と同じ目線にいることだと思います。

また、それらの一連の活動の中で、学生をどう参画させるかということにも視点を置き取り組んでいます。

「二十一世紀懷徳堂は、市民の方と大学がともに学び合うことを通して、『地域に生き世界に伸びる』を具現化する場」というメッセージを二十一世紀懷徳堂学主である高杉理事・大阪大学副学長は述べています。研究・教育の成果を広く社会に還元することを目的に、最先端の科学技術から工学・医学から文学まで幅広い分野で、教員と学生が一体となって市民の方と交流して知を発信していく中で、本学の学生がスタッフとして企画・運営に係ることを、二十一世紀懷徳堂は積極的に推進しています。そのことにより、本学の学生が市民の方とのコミュニケーションを通じて学ぶ有形無形の経験は、一つのキャリア教育の在り方ともいえるでしょう。

活動における広報の重要性

これまでに述べたような二十一世紀懷徳堂の主たる活動



重建懷徳堂復元（模型）

と並行して、それを展開していく上で欠かせない活動に「広報」があります。本学の多様な内容と形態で展開する社会学連携活動を、社会に向けていかに効果的に発信するかという知恵が求められています。本学の歴史的経緯を見ればわかるように、二十一世紀懷徳堂ができる前も各部局や学術総合博物館、病院にいたるまで全学において幅広い社会学連携活動がおこなわれてきました。しなしながらその広報となると、大学の部局のホームページに掲載されているだけということが多々ありました。大学の階層の深いホームページの中で紹介されてあっても、市民の方々がそこへたどり着くまでに、その催しは既に終わっていたという面白い話のようなこともあったようです。チラシを作成しても、

どれだけの枚数をどこに配布するかといえば、その人的コストの対費用効果は疑問です。どんな素晴らしい企画でも、それを求める人たちに届かなければ、何の意味もありません。

そこで二十一世紀懷徳堂では、発足当時からポータルサイトとしての「二十一世紀懷徳堂ホームページ」の充実を図ってきました。二〇一〇年には、さらに情報発信力を強化し、双方向の情報の受発信ができるようにリニューアルしました。本学の多彩な社会学連携活動を情報として、どう一元的にわかりやすく発信していくかを考えてのリニューアルでした。

大学は企業のように商品の告知をするわけではありませんが、本学が目指す社会貢献＝社会学連携活動が、このページを見ていただくことでご理解いただけるようページ構成を工夫しています。また、情報を双方向でやりとりするということでは、イベントのフォロー情報コーナーを設けることにより、主催者のメッセージを更新することでより興味を持っていただくことや、ツイッターからそのイベントに関して参加者のサイドからつぶやいていただけるような作りにもなっています。

広報ということでは、こうした自前の広報ツールはもちろんのこと、対外的なメディアをいかに活用するかを考えることも、今後の重要な課題だと思います。

新聞やテレビといった産業メディアに興味を持って取り

上げてもらうためにはプレスリリースなどでの発信も大事ですし、さらにITの拡がりを考えれば、ソーシャルメディアの活用は欠かせないものになってきています。ミクシイやYou tube、ブログなどでの情報発信が誰でも簡単に利用できるようになってきたことから、二十一世紀懷徳堂でも事前の広報を二十一世紀懷徳堂のホームページだけでなく、そうしたツールを使つての発信を試みています。実際、昨年度の「ニセ科学フォーラム2009」を実施した際は、情報を公開した際に様々なブログやメルマガに掲載いただいたことにより、大変な反響をいただくことができました。また、イベント終了後もその後の情報のつながりが継続していくことを考えると、広報活動においていかにそうしたITのツールを活用していくかは課題と思います。

二十一世紀懷徳堂とブランド力

百年に一度といわれた経済不況や地球温暖化、政権の交代など、現代社会は様々な課題を抱えています。そうした時代の中で、大学は何をなすべきなのでしょう。あるいは何を提供していくべきなのでしょう。真の社会貢献において、大学は社会に対してどういう役割を担っているのでしょうか。それぞれの大学の成り立ちや創立の理念あるいは特色をどう社会に発信していくのかということは、大学のブランディングを進めていく上での重要なポイントだと思います。また、そうした活動は同時に大学の認知度を

上げるだけでなく、教職員や学生が、自らの大学の教育理念やアイデンティティを再認識することにつながることもいえるでしょう。

他の大学にない、その大学にしかできない社会貢献、それをいかに世の中に伝えるかは、各大学にとって重要な課題です。そこがきちんと世の中に対してアピールできていく大学は、「ブランド力」があるとと言えるのではないのでしょうか。そのためには、まずなによりも自らの大学への理解とその大学に対する深い愛着が根底になければならないように思います。

二十一世紀懷徳堂も、日々そうした思いを抱きながら、知の拠点として本学の社会学連携活動を具現化していくための活動を推進しています。そしてそれは、大阪大学憲章と懷徳堂、適塾を精神的源流とする本学の理念につながっているものだと考えます。

参考文献

高杉英一・阿部武司・菅真城『大阪大学の歴史』大阪大学出版会、二〇〇九年。

かたい本が売れない

—— 大学出版局に期待すること

笠原敏雄

(心理療法師・心の研究室)

一〇年以上前から、いわゆるかたい本が売れなくなっている。その原因については、既にいくつかの推測が行なわれてきたし、その一部に基づく試みもある（たとえば、持谷、二〇〇九年）。本稿では、まず、これまでの視点とは少々異なった角度から、この問題を検討してみたい。

現代が、歴史的に見て大変動の時代であることについては、今や誰もが、多かれ少なかれ体感していることであろう。その変化は、よく言われる道徳の崩壊や政治的、経済的瓦解ないし破綻などの、一見すると悪い方向への変化ばかりでもなければ、心理的、社会的側面の変化ばかりでもない。興味深い一例としては、生活様式の欧風化や全体的な都市化によるものかどうかはともかく、日本人の容姿さえ、旧世代と今の若者たちの世代とでは、事実としてかなり違ってきていることがあげられる。ふしぎなことに、全体として見栄えのよい方向に変化しているのである。

こうした急激な変化をもたらしている根本的原因を突き止めることは事実上できないが、何ごとも全体の中の部分であるのなら、すべてについて全体的、構造的にとらえなければならず、したがって、かたい本が読まれなくなったという現象についても、より広い視野に立って、大きな変化の一面として眺める必要があるのではなからうか。

知識の周辺で現実で起こっていること

数年前のことになるが、使われた形跡のほとんどなきさうな、全三〇巻近い大百科事典が、近所の資源ごみ置き場に整然と積み重ねられているのを目にしたことがある。この驚愕（あるいは驚嘆）すべき出来事は、この三、四〇年の間に起こった大変動を端的に物語っている。

今の若い人たちには信じがたいことであろうが、一九七〇年頃までは、読めもしない英文の大百科事典を、セール

スマンの甘言に乗ずる形で、何カ月分かの給料をはたいて購入し、床の間に並べて悦に入っていた人たちが実際にいた。当時はそれが、特に外国語百科事典の意図せざる用途のひとつになっていたのである。団塊の世代と呼ばれる私たちが学生生活を送った、その六〇年代末頃の大学生たちは、教科書や教養書をむき出しのまま抱えて街を闊歩していた。岩波書店が刊行した全一八巻の哲学講座の各巻が数万部ずつ売れた（大塚、二〇〇六年、二九ページ）のも、この頃のことであった。実際に読む読まないは別にして、当時はまだ、そうした行動が自慢の種になりえたわけであるが、教養主義が崩壊した今、もしそのようなことをすれば、時代錯誤的な愚かしい行動にしか映らない。

その後、百科事典の重心は、冊子版からCD-ROM版やDVD版へと移行するかに見えた。ところが現在では、有力な出版社のほとんどが、そうした電子版からも手を引いてしまっている（朝日新聞、二〇一〇年三月三十一日夕刊）。信頼性の低いことを多かれ少なかれ承知しながら、ウェブの無料百科事典などですませてしまう人たちが増えたことも、その一因なのかもしれない。知識に対する憧れは、このような変化と並行して、ほとんど消えうせてしまった。時代の必然の流れとしての、知識の凋落現象である。このような流れに、後戻りはない。しかしながらこれは、人間の退歩どころか、大きな進歩と考えるべき現象なのである。したがって、冊子版の百科事典が処分されるようになって

たのは、所蔵スペースが確保できなくなったためというよりは、知識というものの受け取りかたが、根本から変わってきた結果なのであろう。かつて西洋では、写真術の登場によって、多くの肖像画家が仕事を失ったというが、知識の切り売りで命脈を保ってきた少なからぬ知識人たちは、その時のように、本来あるべき競争への参加を余儀なくされ、その生存が危ぶまれる状況に陥ったのである。

出版をめぐる状況の中で起きていること

かつては、三千部以上売れたら本ではない、などというシニカルな発言をする書籍編集者もいた。出版不況以前には、全体として本が売れていたもので、このような放言も看過される余地があった。ところが、そうした状況は、一〇年ほど前に一変してしまふ。ある編集者の言葉を借りれば、「昔は『売れる本を出そう』と言ったら『バカなことを言うな』と一蹴されていたのに、最近では、『いい本を出そう』と言うと、『何を寝ぼけたことを言ってるんだ』とやはり一蹴される」状況になったのである。一九二〇年代以来、「産業としての出版とパブリックな文化の担い手としての出版が、ある程度まで合致して営まれ」という僥倖的狀況が続いてきたが、この夢のような結合は、今やほとんど解消され（吉見、室・中俣編、二〇〇〇年、一五ページ）、硬派出版社は、わが国に限らず、少数派読者の知的必要に応える能力を、急速に失いつつあるのである（津野、室・

中俣編、二〇〇〇年、一一〇ページ）。

出版社には、文化の担い手という重要な社会的使命があると言われてきたにもかかわらず、かたい本が読まれなくなったということは、出版社からそうした使命が大幅に剝奪されてしまったことの現われにほかならない。

それでいながら、出版点数自体は減るどころではない。多くの出版社が、初版部数を落とす代わりに、発行点数を増やすという戦略をとったからである。一九九五年に急増した発行点数は、最近では年間八万点に迫るまでになっている。その結果として、どのようなことが起こったか。

まず、必然的に一点の編集作業にあまり時間がかけられなくなったため、硬派の出版社が出す本にも、さまざまなほころびが見えるようになった。拙劣な編集の著書や、誤訳や不適訳に満ちあふれた翻訳書が、一流とされる出版社から出されたものの中にさえ、珍しくなくなったのである。また、売れる（と営業部が想定した）本ばかりが優先され、出した本が通らなくなったため、編集という仕事に魅力を感じなくなったとして、転職してしまう編集者も出てきている。編集者や校正者という専門家たちによるチェックが入らないウェブ上の発信と違って、信頼性の高いことでこそ存在意義のあった書籍出版の世界は、経営的側面からばかりでなく、このような意味でも、今まさに危機的な状況に置かれているのである。

かたい本が読まれなくなった理由を考える

現在、世の中で起こりつつある変化の根本を見ると、特に先進諸国で顕著であるが、権威に対する無条件の従属という、旧来の人間に本能的とも言えるほど根強く見られた特性が、相当に薄れてきたことと、有史以来初めて、生活のためにとられる時間が大幅に減少し、余暇が圧倒的に増えたことのふたつがある。では、これらの変化は、読書に、どのような影響を及ぼしているであろうか。

前者の変化からすると、読者は、識者の評価などにとらわれることなく、自分が本当に読みたい本を自由に選ぶ方向へ進むはずであるし、後者からすれば、それこそ、余暇を十分に活用して、読みたい本を存分に読むという方向に進むはずである。では、実際にそのような帰結になっているかと言えば、この順境をまさに謳歌している少数の先覚者の精鋭を別にすると、事実には正反対のように見える。

余暇が増えたことについては説明の必要もないが、ここで、前者の変化について少々補足しておく、外部からの暗黙の規制や誘惑（ベルクソンの言う「閉じた道德」）にとらわれることが、加速度的に少なくなり、それに代わって、個人の意志や自発性の表出が求められるようになったということである。しかしながら、いわば積年の呪縛から解放されたことで、かえってとまどっている人たちがほとんどのように見える。かつての外的規範が維持された状況

であれば、荒れる成人式にしても学級崩壊にしても、起りようがなかった。まだまだ緒についたばかりとはいえ、この変化は、人間の本性という点からすると、きわめて重大なものと言わざるをえない。ここで問題になるのは、先のとまどいの本質である。

誰もが意外に感じることであろうが、人間の行動の中で、おそらく最も難しいのは、(1)自分が心底から望むことを、(2)時間の余裕がある時に、(3)自分から進んで行なう、という三条件がそろった時である。そして、その先にある幸福感が大きければ大きいほど、一般にその行動は難しくなる。逆に、それらの条件がはずれるにつれて、まさに呪縛が解けるかのように、行動は容易になる。

自分のためになる行動であればあるほど、それを、苦痛なものという思い込みを作って避け、時間つぶしのな行動に逃げてしまうことが多い。現実からの逃避と言われる現象である。自分でも何とかなければならないことを重々承知しているにもかかわらず、いわば内なる悪魔の誘惑に負け、自分の体が意識のいうことをきかなくなるのである。ついでながら、この種の現象を、脳の機能によって説明するのは、問題を不明瞭化する以外の何ものでもない。

かくして、権威から自由になったはよいが、あり余った時間をつぶさなければならぬためもあって、利他的な楽しみにふける人たちが増えた結果、娯楽産業は空前の繁栄を遂げている。昨今の書籍の突出したベストセラーは、こ

うした脈絡でとらえるべき現象なのであろう。

自分にとつての真の幸福を避けようとして利他的な楽しみに走ることを、聖書では、「滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い」と的確に表現している。再びベルクソンの言葉を使えば、これからの時代には、自分の中にある「開いた道徳」の発現が要請されることになるが、人間の意識から見ると、幸福に至るその道は、まさに、いばらの繁茂する細道なのである。

次に、誰であれ経験的に承知していることであらうが、時間というものは、特に用事のない休日を考えればわかるように、長ければ長いほど、怠惰に過ごしてしまう傾向が強い(ここでその理由を説明する余裕はないので、関心のある方は、拙著「笠原、二〇〇四年」を参照されたい)。そうするとここに、読書に関するひとつの原則のようなものが浮かび上がってくる。つまり、例外的な精鋭的読者を除くと、**時間の余裕があればあるほど、頭を使わない、より娯楽的なものが好まれ、かたい本は避けられる**、ということである。

加えて、同じ行動であっても、それを自発的に行なう場合には、外部から要求された場合と比べて格段に難しくなる。わかりやすい実例としては、部屋の片づけが難しい人たちがあげられよう。友人であれ工事の作業員であれ、誰かを部屋に迎え入れなければならぬ時には、短時間のうちに手際よく片づけることができるが、自発的に片づけよ

うとすると、同じ片づけでも極端に難しくなるのである。宿題や仕事についても同じことが言える。締め切りがあつてすら、間際にならないと手につかない人が圧倒的に多いが、そのような人たちの場合、締め切りがなければ、自分が望んでいても永久にできないであろう。人間は一般に、自発性というものに対する抵抗が極度に強いのである。

以上のように、権威や規範の呪縛から解放たれつつある現在、自分が本当にしたいことを自由にすることが、いわば隠れた自主規制のために、かえって難しくなっている。ここで、読書に関するもうひとつの原則がはつきりしてくる。それは、他人との勝ち負けという背景の中で教養を身につけるといふ虚栄的姿勢から離れ、本当に読みたい本を自由に選べる環境に置かれると、多くの人では、それが（特にかたい本であればさらに）難しくなる、ということである。

大学出版局に期待すること

したがって、かたい本を読む人が少なくなつたのは、二通りの意味で歴史的必然ということになるわけであるが、では、どうすればよいのであろうか。いずれは読者が、オリジナル리티の高い、読み応えのある本に戻ってくるはずであるが、それには少々時間がかかることと、以前の数に届かないことは、以上の考察からはつきりしたように思う。問題は、当面どうすればよいのか、ということである。

結論を言えば、この点についての妙案はない。大学出版局が、独立採算制からある程度自由な立場に置かれていても、以前より制約は多くなっているはずである。とはいへ、紙媒体の本が電子版に駆逐されることは、少なくとも当分ないので、目先の誘惑に負けて水準を落とすことのないように留意しつつ、歯を食いしばってでも、かたい本の出版を従前通り続けてほしいということに尽きる。

参考文献

- 大塚信一（二〇〇六年）『理想の出版を求めて』トランスビュー
笠原敏雄（二〇〇四年）『幸福否定の構造』春秋社
佐伯かおる（二〇〇九年）『電子化への移行期に本に期待すること』『大学出版』第81号、一七―二二ページ
室謙二・中俣暁生編（二〇〇〇年）『人はなぜ本を読まなくなったのか？』トランスアート
持谷寿夫（二〇〇九年）『書物復権』の試み』『大学出版』第80号、一〇―一四ページ

大学出版部ニュース

●協会ウェブサイトがリニューアルされた。新刊速報や図書館納本(青タン)へのデータの移行・加工といった課題は残っているものの、協会の様々な情報の発信と各出版部の書籍の普及販売強化に大いに期待したい。

●二〇一〇年度定時社員総会が五月二十八日に日本出版クラブで開催される。二〇〇五年の協会法人化以降、新規加盟申請が毎年審議されてきたが、今年は無。しかし大学出版部設立の動向は継続しており、協会の求心力と組織力の強化を目的に二〇一〇年度事務局事業として、全国の大学への出版部設立のアンケート調査を予定している。

●編集部会の依頼で「編集マニュアル」に「著作権」を書いたが、「出版契約」を充実させて欲しいとの依頼。その出版契約書の新たなひな形が日本ユニ著作権センターから発表される。「急速に発展するデジタル使用や二次的使用に対応すべく改訂した著作物利用許諾契約書」である。書籍の「複製権」に留まらぬ権利獲得は今や出版社に必須の課題。導入を前提に確認を薦めたい。

北海道大学出版会

▼B・ウォーカー著／浜健二訳『絶滅した日本のオオカミ―その歴史と生態学』(A5判・五二五〇円)民俗学・生態学や進化論に基づく新たな枠組みと、北米との比較による歴史研究。▼櫻井義秀・中西尋子著『統一教会―日本宣教の戦略と韓日祝福』(A5判・四九三五円)元および現役信者の聞き取り等により総合的に分析した、初の本格的な研究書。▼宮崎悠著『ポーランド問題とドモフスキ―国民的独立のパトスとロゴス』(A5判・六三〇〇円)国民的統一と独立を唱えた政治家の思想と限界を解明。▼川井唯史・高畑雅一編著『ザリガニの生物学』(A5判・一三六五〇円)博物学・環境生態学から理科教育までを網羅。▼石井聡著『もう一つの経済システム―東ドイツ計画経済下の企業と労働者』(A5判・五八八〇円)非効率性のメカニズムや労働者の実像に迫る。▼〈北大文学研究科ライブラリ〉創刊! 1高橋英光著『言葉のしくみ』(四六判・一六八〇円) 2北村清彦編著『北方を旅する』(四六判・二一〇〇円) 3櫻井義秀著『死者の結婚』(四六判・二五二〇円)

弘前大学出版会

▼『教師のための紫外線講座―紫外線が子どもをねらう―』弘前大学附属病院長花田勝美著(A5判・八八頁・定価一四七〇円)ある日突然気になるシワやシミ。元凶は太陽紫外線。皮膚がんや免疫の低下も招きます。子どもの時からの賢い紫外線対策が「転ばぬ先の杖」になります。本書には、「紫外線発見の話」、「光老化の機序」、「紫外線による皮膚病」、「紫外線防御」のエッセンスをコンパクトにまとめました。

▼『幻灯夢―弘前大学「言語力」大賞作品集―』弘前大学附属図書館編(四六判・一四三頁・定価八四〇円)弘前大学では、学生の言語力向上のために四〇〇〇字程度の文学作品と評論を募集し「学生「言語力」大賞コンテスト」を毎年実施している。平成二一年度は数えて五回目の節目にあたり、これまでの大賞、優秀賞の作品一一編を本書にまとめた。最近、若者の「言語力」不足がマスコミで論じられる中、太宰を生んだ学舎で作家に憧れる新鮮な学生たちの作品集である。

東北大学出版会

▼三浦秀一編『東北人の自画像』（四六判・一八三頁・一五七五円）東北大学大学院文学研究科が企画する「人文社会科学講演シリーズ」の第四弾。柳田国男から先生と呼ばれた「遠野物語」の先駆者・伊能嘉矩や、慈覚大師円仁、奥州藤原氏の祖・藤原清衡、東北帝大教授太田正雄（文学者・木下李太郎）ら、東北に縁深い人物の実像を美術・文学・民俗学・歴史学の分野から浮き彫りにする。四人の研究者による市民向け講座の講演内容を丁寧に戻録し、貴重な資料のカラー写真等を添えて書籍化。

▼大淵憲一著『謝罪の研究』（四六判・一九一頁・一七八五円）人は、なぜ謝るのか？人は、なぜ謝った人を許そうとするのか？謝罪は日常の当たり前の行為として行なわれているが、そのメカニズムは十分に解明されていない。謝罪が持つ社会的・心理的意味とその重要な役割・機能について、謝る側と謝られる側の両面から大胆に分析。謎の多い「謝ること」の本質に迫る。東北大学大学院文学研究科による新シリーズ「人文社会科学ライブラリー」の第一巻。

流通経済大学出版会

▼『企業間関係の構造―企業集団・系列・商社―』島田克美著（A5判上製・三六六頁・四二〇〇円）

失われた日本経済の二十年、企業シテムをめぐる議論は混迷を続けた。その中で本書は時流に流されずに企業間関係の論理を探り内実を分析している。企業集団においては独立企業をベースにした行動の相互性と集団性、系列においては企業の地位の上下に基づくパワー関係、商社においては商権形成行動とネットワーク統合戦略、これらこそ決定的に重要なパラパラの組織と捉えがちな議論の空白を埋める注目の一書。

▼『社会学は面白い！―初めて社会学を学ぶ人へ―』流通経済大学社会学部入門書編集委員会編（B5判・二八〇頁・一五七五円）

社会学を志す若者が減少している。さまざまな動機・学力・希望を抱いて入学してくる新入学生を対象に、社会学の面白さや有用性、さらには大学における学習や研究についてわかりやすく解説する。社会学を学ぶ学生の記憶に残る一書。

聖学院大学出版会

▼平山正実編著『死別の悲しみから立ち直るために』（臨床死生学研究叢書2、A5判上製）四二〇〇円

本書は、「臨床死生学研究叢書」の第二巻であり、「死別の悲しみからの回復のあり方、グリーフワークを主題としている。グリーフワークは、「悲嘆の作業」あるいは「喪の仕事」などと訳される。身近な人との死別によって生じる悲哀に、精神的、また身体的な作業を通して立ち向かい、悲しみを乗り越えることである。

かつて、多くの文化に、「喪に服する」という社会的儀礼があった。死別の悲しみから回復するためには一定の時間が掛かることが共通理解としてあり、「喪」の期間にさまざまな仕方では遺族であることを人々に示した。人々は喪に服する遺族の姿を見て悲哀を理解し、悲嘆からの回復を期待したのである。しかし、現代は、「喪に服する」という習慣が失われている。そのことが本来悲しむべき悲嘆を隠し、遺された人々の精神的、身体的な変調を引き起こしているのではない。本書は医療、カウンセリングなど現場を持つ研究者からの研究報告である。

聖徳大学出版会

- ▼村井靖児著『音楽療法を語る―精神医学から見た音楽と心の関係―』（四六判・二八〇頁・二一〇〇円）音楽療法の第一人者である著者の、長年にわたる研究をベースにし、専門的でありながら一般の読者にもわかりやすい内容となっている。音楽療法は心身の病理に対してどのような効果をもたらすのか、音楽はなぜ心を癒すのか、心と音楽との関係を解き明かす。
- ▼森彪著『医における癒し―人間関係の形成のなから―』（四六判・二八〇頁・二一〇〇円）本書では小児科医の医療現場での経験をもとに、病氣と闘った人たちの実例が紹介され、著者との交流が描かれている。純粋な医学書ではなく、高度に発達した現代医学において人間的交流の必要性を強く訴えかけている。
- ▼高橋大海監修・Jソロイスト歌唱『親子で楽しむ唱歌集』（音楽CD・三四〇〇円）文部唱歌をはじめ、「春が来た」、「小さい秋みつけた」など文化庁「親子で歌いつこう日本の歌百選」にも選定された二三曲を含む全四二曲が収録されている。

麗澤大学出版会

- ▼陳玉雄著『中国のインフォーマル金融と市場化』（三七八〇円）中国における（インフォーマル）金融（正常な経済活動のために資金を供給する非公式な金融ルート）の変化と発展の歴史をたどり、中国政府の意図を検証しつつ、市場経済化に期待される役割を問う労作。
- ▼秋庭道博著『深い言葉―よりよく生きようとする人たちへ―』（一六八〇円）言葉には力がある！ ゆうゆうと、まっすぐ生きるために―人生を動かす「光る言葉」185。多くの先人や同時代人の言葉を手がかりに、さまざまなシチュエーションにおける迷い・悩みをめぐる考察。
- ▼伊東俊太郎著『伊東俊太郎著作集第五巻 科学論・科学哲学』（八一九〇円）
- ▼福田恆存著『福田恆存評論集十五巻 西歐作家論』（二九四〇円）



慶應義塾大学出版会

- ▼石原あえか著『科学する詩人ゲーテ』（二九四〇円）。一八世紀の詩人ゲーテは、ヴァイマル公国の高級官吏であり、同時に熱心な自然研究者であった。等身大の人間の視点をけつして失うことなく、終生、誠実に自然と対話し続けたゲーテの詩と科学の交感を気鋭の著者が鮮やかに描き出す。
- ▼本間正義著『現代日本農業の政策過程』（三九九〇円）。日本農業の再生と自立には、どのような戦略が必要か。本書は戦後の日本農政を歴史的に分析するとともに、その政策を経済学的観点から体系的に整理。国内問題、対外政策、そして近隣国の動向を検証することで、新しい農業のあり方を提言する。（総合研究 現代日本経済分析）第三弾。
- ▼『パブル／デフレ期の日本経済と経済政策』全七巻（企画・監修 内閣府経済社会総合研究所）。一九八〇年代からの四半世紀日本経済の動向と経済政策を、様々な視点から点検・評価する。わが国を代表する研究者、官民エコノミストの総力を結集し貴重な反省・教訓を後世に伝える画期的研究シリーズ。全巻完結！

ケンブリッジ大学出版局

▼『The Study of Language 4th Edition』

(Hardback 9780521765275, USD 85.00
Paperback 9780521749220, USD 29.99)

一九八五年に第一版が出版されて以来、常に世界中でベストセラーとなつていゝ Yule の『The Study of Language』の第四版です。本書には二十の新しいセクション、五十以上の新しいタスクが含まれています。また、学習の手助けとなるオンラインガイドもついています。

▼『NIST Handbook of Mathematical Functions』

(Hardback 9780521192255, USD 99.00
Paperback 9780521140638, USD 50.00)

アメリカ国立標準技術研究所 (National Institute of Standards and Technology, NIST) が世界の科学者と共に十年の歳月をかけて進めた研究の集大成の本書は、関数ハンドブックとして、数学研究、工学研究、統計学、経済分析など幅広い分野において欠くことのできない一冊です。PDF で各章の内容を検索できる DVD 付。

産業能率大学出版部

仕事力を高める。SANNNO 仕事術シリーズ (各一五七五円)

▼日沖健著『問題解決の技術』
実践的な思考法などのツールを用いて最適な解決策を引き出す問題解決スキルをわかりやすい事例を通じて身につける。

▼高島徹治著『資格勉強法』
資格取得をめざす方に、最小の投資で最大の効果が上がる学習の着眼ポイントと、考える勉強法の極意を身につける。

▼堀公俊著『ビジネス対話の技術』
異質・多様な意見のぶつかり合いから創造的・協調的な合意を引き出し、良好な人間関係の構築をめざす話し合いのスキルを習得する。

▼大嶋利佳著『言葉つかいの技術』
意外にわかつていない、できていないのが言葉づかい。相手に好感・好印象を与え信頼を高める日本語の使い方を身につける。

▼水口和彦著『時間活用術』
「時間が無い」「忙しい」なかで、テキパキとすばやく仕事を進めて、質の高い成果・アウトプットを創出するためのスキルを習得する。

専修大学出版局

▼宇都築子・柴田弘捷編著『周辺メトロポリスの位置と変容』(A5判・三五七〇円) 巨大都市東京・大阪に隣接する川崎市と堺市に光をあて、都市の多面的な構造とそこにかかわる人々の生活について、社会学的視点から隣接都市の「自立」の可能性を考察する。

▼櫻庭太一著『インターネット文化論』(A5判・二二〇〇円) 日本のインターネットの普及状況とユーザー活動(インターネットコミュニティ)を俯瞰し、検索機能の充実やWikiサイト、ケータイ小説などについて、メディアとしての相互関係の視点から検証する。

▼『専修大学図書館所蔵西洋写本ファークシミリ』全3巻。『万国史』(A3判・一四七〇〇円) 一四世紀にベネディクト会士ヒグデンによって書かれた壮大な年代記で、その彩色写本をオールカラーで複製し、解題を付した。『蕃薇物語・羊皮紙本』(A4判・六九三〇〇円) 『蕃薇物語・紙本』(A4判・八八二〇〇円) 一四〜一五世紀にかけて制作された、宮廷風恋愛をアレゴリー手法で描いた物語写本の複製と解題。

大正大学出版会

社会福祉学関係の教科書

▼中村敬著『子どもの健康と福祉―人間学を学ぶ人のための子どもの科学―』（A5判・一九八頁・一五七五円）子どもの健康と福祉は、子ども期の全年齢において重要な課題であり、子育て支援は乳幼児期に限られることはない。本書は、乳幼児期から学童期前半を中心に、子ども期全般を通じた健康・病気・福祉の問題などについて平易に論述する。

▼大正大学社会福祉研究会編『人間についていいな 社会福祉原論Ⅰ』（A5判・一八七頁・一八九〇円）社会福祉の思想・歴史・原理・方法・分野などについて平易に解説する。社会福祉を学ぶ楽しさと理解を深める工夫をこらした内容となっている。

▼大正大学社会福祉研究会編『ソーシャルワーカーの社会福祉原論Ⅱ』（A5判・二四八頁・一八九〇円）社会福祉士の養成課程の教育カリキュラム内容に沿いつ論述する。大正大学の社会福祉教育の特徴や独自性を加味した構成となっている。ソーシャルワーカーを目指す学生必携の書。

玉川大学出版部

▼夏目達也・近田政博・中井俊樹・齋藤芳子著『大学教員準備講座』（A5判・二五二〇円）多様化した学生の教育や高度な研究、地域社会への貢献などの専門的職務の遂行を期待されている大学教員が前もって知っておくべき知識や技能を体系的にまとめる。大学教員を志す人へ。

▼渡辺一雄編『教育政策入門1 学校を考える』（A5判・二七三〇円）教育政策の動向を法制史でたどりながら、戦後の学校教育がどのような子ども観、教師観、学校観でおこなわれてきたのかをひもとく。学校教育の可能性を考察する。

▼渡辺一雄編『教育政策入門2 学校の制度と機能』（A5判・二五二〇円）日本の近代化を担った学校教育。教育行政上の重要であった政策課題に注目しながら、実態を分析。戦後の教育制度の大きな流れを俯瞰し、学校制度の未来を考える。

▼沖山吉和編著『教員採用試験の論作文』（A5判・一六八〇円）論理的で、教育への使命感や子どもへの愛情がにじみ出る論作文の書き方を解説。教育課題の分析、論文文例が豊富で、幼稚園教師・保育士の試験にも対応する。首都圏採用試験の分析付。

中央大学出版部

▼金正勲著『漱石と朝鮮』（二八九〇円）漱石は朝鮮をどのように見ていたか。漱石の言説ならびに作品に描かれた朝鮮関連の描写を徹底的に検証し、漱石と朝鮮の問題の核心に迫ることを試みた韓国人研究者による力作。巻末付録では韓国における漱石本の出版状況等を紹介、漱石が韓国でいかに読まれ研究されているかを知るうえでも興味深い。

▼河野正男・小口好昭編著『会計領域の拡大と会計概念フレームワーク』（三五七〇円）マイクロ会計とマクロ会計を会計領域に含める斬新な視点から、会計の社会的・文化的意義を再検討。環境管理会計、環境監査、自治体環境行政、持続可能な森林管理の会計という新分野に挑み、マイクロ会計とマクロ会計を統合する会計学の新しいパラダイムを示唆。

▼ジェイムズ・ボズウェル著／諏訪部仁監訳『ヘブリティース諸島旅日記』（四二〇〇円）伝記の最高峰と目される『ジョンソン伝』の著者ジェイムズ・ボズウェルが主人公であるサミュエル・ジョンソンと敢行した一七七三年秋のスコットランド奥地の旅の詳細な日記の全訳。

東京大学出版会

▼ロバート・キャンベル編『Jブンガク』英語で出会い、日本語を味わう名作50（一八九〇円）

NHK教育テレビ「Jブンガク」の単行本化。「枕草子」、「方丈記」から「太陽の季節」、「間宮兄弟」まで、一度は読んでおきたい古今の日本の名作50編を厳選。時代背景やあらすじをおさえてつづ、作品のワンシーンを原文と英訳で読みくらべる。

英語の発想や編者のユニークな視点で、日本の言語文化をふだんとは違った角度から見つめなおさせてくれる。はじめて読む作品も、読みなおす作品も、ほかでは出会うことのできないその魅力に、ぜひここでふれてほしい。



東京電機大学出版局

▼小林宏一他編『科学技術ジャーナリズムはどう実践されるか』（二九六頁・三三六〇円）シリーズ「科学コミュニケーション叢書」第三弾。前二冊「科学技術は社会とどう共生するか」「ジャーナリズムは科学技術とどう向き合うか」は、自然科学および社会科学の立場から科学技術ジャーナリズムについて解説したものであった。本書は、科学技術ジャーナリズムが具体的にそれをどのように社会に向けて実践すればよいかを解説したテキストとしてまとめられている。

▼リチャード・N・カツツ編『ウェブポータルを活用した大学改革』（梶田将司訳・二七四頁・三四六五円）大学における情報戦略とウェブポータルには密接な関係がある。中長期的には、現在の組織の再編も視野に入れて、情報戦略やその効果観測点としてのウェブポータルの整備を継続的に押し進める「情報戦略システム」の構築が必要である。米国の大学でのウェブポータルにまつわる初期段階の状況をまとめた本書は、各大学において情報戦略とウェブポータルの整備に関わる方々の一助になるであろう。

東京農業大学出版会

▼『農業普及指導論』藤田康樹著
農業指導の役割は、農業普及と農業者・集団の課題解決とその成果の波及の促進と農業・農村活性化―農業者・地域の自発的課題解決の支援―にあること、このことを考える。



平成二十二年二月
A5判／八五頁
税込価格
一四七〇円

▼『IT活用で変わる農業普及』福田浩一著
普及情報活動のシステム化に長く携わってきた著者が、普及現場における調査結果をもとに、ITを活用した普及情報活動の改善方策を提案する。



平成二十二年三月
A5判／一四〇頁
税込価格
一六八〇円

東京農工大学出版会

▼『蝶の道—Butterflies—』A4変形版・一三六頁・三七八〇円（税込み）

昆虫写真家・海野和男による蝶の写真集。本書は、世界と日本各地で、風景とともに撮影した蝶の生態写真約一二〇点をまとめたものである。

海野和男には、十才の頃に長野県で水を飲み路上におりていた蝶たちが一斉に飛び上がる光景を見た体験がある。その写真家は、二〇〇六年にペルーのアマゾンで、無数の蝶が飛び交う路上を歩いていた。この時、少年時代の蝶との出会いが、鮮明によみがえり、そこから本書は生まれた。写真解説は、一六頁をさいて掲載。「蝶を撮り続ける」という章には、三〇年ほど前から同じコンセプトで撮影してきた写真を十二点ほど解説とともに掲載している。蝶の本格的な写真集としては、十五年ぶりとなる渾身の書である。



法政大学出版局

▼M・ジェイ／浅野敏夫訳『文化の意味論』（四八三〇円）米国の気鋭の批評家が、しなやかな論理と機知で批評理論やポスト構造主義以降のさまざまな思想の「現在」を捉えたエッセー集。

▼A・コジェーヴ／今村真介訳『権威の概念』（二四一五円）権威とは何か？ 父・主人・指導者・裁判官という四つの権威類型の分析を通じて、独創的で普遍的な政治理論／法哲学を構想する。

▼F・C・バイザー／杉田孝夫訳『啓蒙・革命・ロマン主義』（八七一五円）フランス革命後一〇年間の分裂と緊張のなかで、一八〇〇年以後のドイツ政治思想はどのようにして芽生えたのか。

▼田口茂『フツサルにおける〈原自我〉の問題』（五一四五円）膨大なテキストを基に、いまだ明確に提示されたことのないフツサル最晩年の「原自我」論の根源性を初めて体系的に記述する。

▼難波匡甫『江戸東京を支えた舟運の路』（三三六〇円）今は忘れられた舟運の路を実地にたどり、水際に展開した豊かな文化を掘り起こす。「水と（まち）の物語」シリーズの第二弾。

武蔵野大学出版会

▼ケネス・タナカ著『アメリカ仏教—仏教も変わる、アメリカも変わる—』（A5判・三四〇頁・二一〇〇円）

アメリカで仏教徒として育ち、仏教学者にして僧侶でもある著者は、一九六〇年代前半の中学・高校時代、「宗教は？」との質問に「アイ・アム・ア・ブディスト」というかわりに「アイ・ゴウ・トゥ・ア・ブディスト・チャーチ」と答えていたという。著者が仏教徒であることに引け目を感じるほど、当時仏教はアメリカ社会で認知されていなかった。しかし、仏教はその後アメリカで著しい伸びを示し、今では多くの有名人が仏教への傾倒を公然と表明する。本書はアメリカに浸透する過程での仏教の変容と、仏教を受容したアメリカの人と社会の変化をとらえて、アメリカを通して宗教、特に仏教がもたらす平安や、社会における宗教（仏教）の意義を問い直す。



武蔵野美術大学出版局

▼『絵画空間を考える』堀内貞明・永井研治・重政啓治著（A5判、一九二頁、二一〇〇円）

日本を中心とした東洋、西洋とに地域を大別し、古代から現代までの絵画における空間について三人の作家が〈描き手〉の視点で分析。「遠近」をキーワードに、それぞれの地域や時代における特徴的な作品、絵画形式を取り上げ論じた。

多数の図版と丁寧な用語解説を加え、描き手みずからが絵画について思考することを促すとともに、鑑賞者を絵画空間の考察へと誘う。

▼『日本画の用具用材』重政啓治・神彌佐子・星晃・和田雄一著（A5判、一九二頁、一八九〇円）

日本画制作のために必要な用具用材を「接着剤」「日本画絵具」「基底材」「筆・刷毛」「その他の用具」に分類し、解説。

巻末の「用語解説」は五十音順で使いやすく工夫され、『丹青指南』のような古書にあるものの、現在では使用されない技法についても触れるなど、本学ならではの日本画入門書である。

明星大学出版部

▼『教員・教職志望者のための教育法の基礎―教育政策の法制・組織・財務』樋口修資 二三一〇円（新刊）

◇教育政策・行政・財政、中立性・自主性、組織・機能、教育委員会制度、学校制度・就学制度、学校の管理運営、教員の免許・養成・身分・服務、教育課程と教科書、学校の保健安全・食育・事故など、教育全般にわたる関係法規を15章に分かつて解説。それぞれに参照条文を付し、また各ページに重要語を注記した。

▼『国語科教育入門―小学校教員を指すために』

長谷川清之 二二〇〇円（新刊）
◇子どもたちがこれからの社会によりよく生きるため、その自己実現になくならない学びの場としての国語科の指導の在り方について考究する。

▼『算数科教育の研究』

小野英夫 一四七〇円（新刊）
◇算数・数学教育の沿革、目標、学習の過程を概観する。具体的指導例を多く取り上げた自学自習のための解説書。

▼『第2版 子ども発達と環境―児童心理学序説』塚田紘一 二四一五円

関東学院大学出版会

▼『民主主義を考える―過去、現在そして未来へ』糠塚康江・藤田潤一郎編著（一八九〇円）民主主義は、一方であまりにも自明であり、他方で常に論争的である。本書は、古代と近代の思想史、近代国家の制度枠組、今日の地方分権、グローバル化という多角的な視点から解き明かすことで、民主主義を問い直す試みである。



▼『改訂 水害―治水と水防の知恵』宮村忠著（一九九五円）多数の河川が国土を刻む日本では治水が永遠のテーマである。公共事業に頼るあまり、被害を大きくしている現代水害の実態を紹介しながら、各地に伝わる自主防災の知恵の再考を提唱する。



東海大学出版会

- ▼駒井古実・吉安 裕・那須義次編『日本産鱗翅類―系統と多様性』（三九九〇〇円）
- チヨウ・ガの系統や高次分類について多数の線画やカラー写真にて解説。鱗翅類の系統分類の歴史をたどり、形態、生態的情報の最新知見を紹介し、日本産鱗翅類の多様性について触れる。
- 特色・鱗翅類の形態について専門用語の平易な解説。寄主植物別にガ類の検索が可能。初めて図説された種を多数含む幼虫図鑑。
- ▼ポール・R・ピネ著／東京大学海洋研究所監訳『海洋学』（五八八〇円）
- 海に関する物理、化学、地学、生物学など、海の全体像をビジュアルにわかりやすく紹介する。『海洋学の入門書』。
- ▼佐藤 徹編著『教職論―教職につくための基礎・基本』（二八九〇円）
- 教員になるための知識・資質・能力を養うために、教職の意義および教員の役割、教員の職務内容をまとめる教職課程テキスト。

名古屋大学出版会

- ▼高田康成著『クリティカル・モーメント―批評の根源と臨界の認識』（三九九〇円）
- 相對主義の時代に精神をゆだねるままではよいのか。批評の再生をはかぬ。
- ▼松浦正孝著『大東亜戦争』はなぜ起きたのか―汎アジア主義の政治経済史―（九九七五円）
- 「大東亜戦争」の核心に初めて光をあてる渾身の力作。
- ▼春日豊著『帝国日本と財閥商社―恐慌・戦争下の三井物産』（八九二五円）
- 「大東亜共栄圏」の運営を支えた巨大商社の戦時期の経営を初めて総合的に解明。
- ▼韓載香著『在日企業』の産業経済史―その社会的基盤とダイナミズム―（六三〇〇円）
- エスニック・マイノリティの経済発展を可能にするものとは何か？
- ▼中兼和津次著『体制移行の政治経済学―なぜ社会主義国は資本主義に向かつて脱走するのか―』（三三六〇円）
- 大転換、そして多様な資本主義へ。
- ▼H・ヨアンソン他編／岡野忠明監訳／岩瀬敏・中田実訳『ストレスと筋疼痛障害―慢性作業関連性筋痛症―』（八八二〇円）
- 医師やリハビリテーション医学・東洋医学・ストレス治療関係者必携の書。

三重大学出版会

- ▼『経度の発見と大英帝国』石橋悠人著 A5・二五四頁・二一〇〇円
- ▼はじめに 第1章 再発見された経度 第1節 経緯度の概念 第2節 地図と空間の再検討 第3節 研究史と本書の課題 第2章 経度の追求 第1節 経度法の制定 第2節 クロノメーターと月距法の完成 第3節 経度測定法の「普遍性」 第4節 クックとトゥピアー 二つの地図をめぐる 第3章 科学組織としての経度委員会 第1節 経度委員会と国家 第2節 グリニッジ天文台と王立協会 第3節 時計メーカー 第4章 経度と帝国 第1節 海軍との連携 第2節 国科学としての経度測定法 第3節 インド会社とクロノメーター 第4節 旅する天文学者たち 第5章 再編と解散・経度委員会最後の10年 第1節 再編と極地探検 第2節 ケープ天文台設立の意味 第3節 経度委員会の解散・結論 文献一覧
- ▼第2版『アメリカ先住民の日々』[Cues Parsons編、神徳昭甫訳。四六判・五七〇頁・定価二九四〇円。

京都大学学術出版会

▼木村大治・北西功一編『森棲みの生態誌』『森棲みの社会誌』（アフリカ熱帯林の人・自然・歴史）Ⅰ五二五〇円、Ⅱ四九三五円）我が国が誇るアフリカ人類学研究を総括、ビグミーらの「森の文化」に学び、人類史の根源から環境保全と地域社会の持続の道を探る。「三つの生態学」に立って近代の熱帯人類学を総括し、21世紀のフィールド科学を展望する。

▼上杉和央著『江戸知識人と地図』（四四一〇円）大国学者・本居宣長と、「ナゾのカルトグラフィアー」と呼ばれる正体未詳の人物・森幸安。18世紀日本の二人の知識人の地図への驚くべきコミットメント。彼らの営為を丹念に跡づけることを通じて、当時の教養における地理的知識の重要性や、知的ネットワークが鮮やかに浮かび上がる。知的興奮に満ちた書。

▼朴一功著『魂の正義ープラトン倫理学の視座』（四二〇〇円）本書はわが国ではじめてのプラトン倫理思想に関する体系的・包括的な研究である。ソクラテスの倫理思想の本質を明らかにした上で、プラトンがソクラテスの思想をどのように受容・展開していったかを明解に論じる。

大阪経済法科大学出版部

▼藤本和貴夫・宋在穆 編
『21世紀の東アジアー平和・安定・共生』（定価 二二六二五円）

本書は、二〇〇八年に大阪国際交流センターで開催された第5回東アジア学国際学術シンポジウム「21世紀の東アジアー平和・安定・共生」で発表された報告論文をもとに、執筆者に手を加えていただいたものを編集したものである。

3つの分科会において、中国、台湾、韓国、タイ、マレーシア、フィリピン、ベトナム、ラオス、カンボジア、インド、インドネシア、ロシア、アメリカ、日本の計十四カ国・地域の三二名の研究者より報告があり、活発な議論がなされた。各分科会のバランスをも考えて、これらの報告のうちの十七本を掲載している。英文の報告文はすべて日本語に翻訳されている。

本書の刊行によりこのシンポジウムがより広く世界に開かれたものになることを願っている。

- 第一部 平和と安全保障
- 第二部 持続可能な経済発展と環境保全
- 第三部 国際移住と共生社会

大阪大学出版会

▼蜂矢真郷著『古代語の謎を解く』（三一頁・二四一五円）日本語の面白さ、奥深さ。古代語はどのように使われていたか、古代語の構成、古代からの地名など。▼松田武者『地球人として誇れる日本をめざしてー日米関係からの洞察と提言ー』（二一八頁・一八九〇円）アメリカとどのようにつき合っていくか。「自立と共生」のグラッド・デザイン。▼大阪大学コミュニケーションデザイン・センター編『Communication Design 3』（三四六頁・二六二五円）大学のコミュニケーションデザインー5年間の奇跡。▼大阪大学グローバルCOEプログラム・コンフリクトの人文国際研究教育拠点編『コンフリクトの人文第2号』（四〇四頁・二五〇〇円）特集1「移行期社会におけるオルタナティブ・ジャスティス」、特集2「人文学にとつての映像とは」、「遅すぎるパレスチナ二国家解決案」等。▼菊地芳朗著『古墳時代史の展開と東北社会』（四〇〇頁・七一四〇円）古墳築造の北縁を刀剣類から実証的に検討。地域史にとどまらず日本列島の国家・民族形式も論じる。

関西大学出版部

- ▼高橋隆博著『巡歴 大和風物誌』（四六判・一九九五円）いまに息づく大和の伝統文化。その美と風土、ささえる人々に焦点をあて、その源流と生い立ちに迫り、魅力をとく。知っておきたい大和の文化遺産をもっと詳しく探る。
- ▼大倉雄次郎他編著『グローバル経済における経営と会計の研究』（A5判・二六二五円）わが国の企業がグローバル化のもとで遭遇する問題を経営学と会計学の領域から多角的・重層的に究明する。
- ▼角田猛之編『中国の人権と市場経済をめぐる諸問題』（A5判・三六七五円）中国におけるリベラルな人権理論とWTO加盟後の市場経済の展開、さらに世界遺産をめぐる環境問題等の最新動向。
- ▼松浦 章著『清代帆船沿海航運史の研究』（B5判・八四〇〇円）一七世紀後半以降の中国帆船ジャンクの活動舞台であった中国沿海。これまで明らかでなかったそこでの帆船活動の実態を解明する。

関西学院大学出版会

- 新刊
- ▼齋藤 由里恵著『自治体間格差の経済分析』（A5上製・一八〇頁・定価二七三〇円）地方財政を分析対象とし、自治体間格差についての現状を明らかにする。
- ▼島村 恭則著『生きる方法』の民俗誌―朝鮮系住民集住地域の民俗学的研究』（A5上製・三四四頁・定価三七八〇円）
- ▼岡田 克彦著『伝統的ファイナンスから行動ファイナンスへ―ファイナンス研究の新しいフロンティア』（A5上製・二七四頁・定価三一五〇円）
- ▼玉田 俊平太著『産学連携イノベーション―日本特許データによる実証分析』（A5上製・一四二頁・定価二四一五円）
- ▼峯岸 由治著『地域に根ざす社会科』実践の歴史の展開と授業開発―授業内容と授業展開を視点として』（A5上製・三〇四頁・定価六〇九〇円）

九州大学出版会

- ▼レイモンド・ウィリアムズ／加藤洋介訳『モダニズムの政治学―新順応主義者たちへの対抗―』（A5判・三九九〇円）モダニズム、アヴァンギャルド芸術、メディア、映画、商業アート、カルチュラル・スタディーズを、碩学ウィリアムズがつなぐ。領域横断の知が新しい知の可能性を開く。20世紀の壮大な文化史。
- ▼松井康浩編『20世紀ロシア史と日露関係の展望―議論と研究の最前線―』（A5判・三五七〇円）21世紀になり改めて注目を集めるロシアを様々な観点から20世紀の歴史の中で捉えなおすとともに、膠着が続く日露関係からの脱却の展望を探る。
- ▼堤啓次郎『地方統治体制の形成と土族反乱』（A5判・六五一〇円）佐賀県における統治体制の形成過程とその特徴を検討することで、明治期における国家形成の特質に迫る。
- ▼大水善寛『J・A・ホブソンの新自由主義―レント論を中心に―』（A5判・三五七〇円）異端の経済学者ホブソンの新自由主義を「レント論」から再構成し、その学史的・現代的意義を問う。

一般社団法人 大学出版部協会賛助会員

【50音順】2010年3月31日現在

株式会社朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
垂細垂印刷株式会社	〒380-0804 長野県長野市大字三輪荒屋1154
株式会社アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408
尼崎印刷株式会社	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
王子製紙株式会社	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
株式会社大森印刷	〒105-0003 東京都港区西新橋3-17-1
岡本出版発送株式会社	〒353-0001 埼玉県志木市上宗岡3-16-2
カクタス・ジャパン株式会社	〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町2-1-1 アスパ日本橋オフィス
城島印刷株式会社	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
株式会社京都学術振興会	〒605-0009 京都府京都市東山区大橋町88-1 辻野ビル2F-A
株式会社クイックス東京	〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-13 ニュー原鉄ビル5F
港北出版印刷株式会社	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
三松堂印刷株式会社	〒101-0065 東京都千代田区西神田3-21 住友不動産千代田ファーストビル南館14階
三美印刷株式会社	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8
三立工芸株式会社	〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F
三和印刷株式会社	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井薬師堂1822-1
信濃印刷株式会社	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
新日本印刷株式会社	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342
大同印刷株式会社	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
ダイニック株式会社	〒105-0012 東京都港区芝大門1-3-4 ダイニックビル7F
株式会社太洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1
株式会社竹尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6
土山印刷株式会社	〒601-8308 京都府京都市南区吉祥院向田東町14
宗教法人天然寺	〒204-0021 東京都清瀬市元町1-4-5-711
株式会社東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
株式会社とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座8-11-1
株式会社日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-9-5
萩原印刷株式会社	〒112-0004 東京都文京区後楽2-21-12
株式会社博報堂	〒107-6322 東京都港区赤坂5-3-1 赤坂Bizタワー 6F
株式会社平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7
株式会社ベル製本	〒112-0014 東京都文京区関口1-17-5
宗教法人法界寺	〒287-0003 千葉県香取市佐原イ-1057
株式会社堀内印刷所	〒335-0034 埼玉県戸田市笹目3-11-5
株式会社毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
株式会社遊文舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31
株式会社読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1
株式会社ライトコミュニケーション	〒101-0042 東京都千代田区神田東松下町28-5 吉元ビル4F
渡辺印刷株式会社	〒152-0031 東京都目黒区中根2-7-1

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同下さり、ご支援頂いている各社様をご紹介させていただきます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

●広告掲載出版社一覧（掲載順）

未 來 社	〒112-0002 東京都文京区小石川3-7-2
み ず ず 書 房	〒113-0033 東京都文京区本郷5-32-21
吉 川 弘 文 館	〒113-0033 東京都文京区本郷7-2-8
ミネルヴァ書房	〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1

一般社団法人大学出版部協会 加盟出版部一覽

北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町1番地 弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市長平畑1-20
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-60-1165

聖学院大学出版会

〒362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

麗澤大学出版会

〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 04-7173-3320 FAX 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

ケンブリッジ大学出版局

〒140-0002 品川区東品川1-32-5
TEL 03-5479-7265 FAX 03-5479-8277

産業能率大学出版部

〒100-0005 千代田区丸の内1-7-12 サビアタワー9階
TEL 03-6266-2400 FAX 03-3211-1400

専修大学出版局

〒214-0033 川崎市多摩区東三田2-1-2 専修大学購買会別館2階
TEL 044-911-7179 FAX 044-911-1382

大正大学出版会

〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1
TEL 03-5394-3026 FAX 03-5394-3038

玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

東京大学出版会

〒113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局

〒101-8457 千代田区神田錦町2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会

〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL 03-5477-2666 FAX 03-5477-2747

東京農工大学出版会

〒183-8509 府中市幸町3-5-8 東京農工大学内
TEL 0423-67-6700 FAX 0423-67-6700

法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北3-2-7 法政大学一〇口坂校舎内
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町1-1-20 武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

武蔵野美術大学出版局

〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

明星大学出版部

〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

関東学院大学出版会

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-7164 FAX 045-786-9898

東海大学出版会

〒257-0003 秦野市南矢名3-10-35 東海大学同窓会館3階
TEL 0463-79-3921 FAX 0463-69-5087

名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市中千種区不老町1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

三重大学出版会

〒514-8507 津市栗真町屋町1577 三重大学図書館3階
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

京都大学学術出版会

〒606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部

〒581-8511 八尾市楽音寺6-10
TEL 072-941-8211 FAX 072-941-9979

大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘2-7 大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1617

関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-5233 FAX 0798-53-9592

九州大学出版会

〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172